

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

〈図書紹介〉『吐き気：ある強烈な感覚の理論と歴史』 W・メニングハウス著 竹峰義和、知野ゆり、由比俊行訳 法政大学出版局 二〇一〇年

菅沢, 龍文 / SUGASAWA, Tatsubumi

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

78

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

2011-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008213>

【図書紹介】

『吐き気 ある強烈な感覚の理論と歴史』

W・メニングハウス著 竹峰義和、知野ゆり、由比俊行 訳 法政大

学出版局 二〇一〇年

菅沢 龍文

本書を手にするのとズシリと重い。本文が七五五頁、注が八九頁という厚みが、生半可な読者を拒絶するかのようである。しかしテーマは「吐き気」であり、読者にとって縁遠いものではない。本書では、吐き気感覚の理論が歴史的に論究される。その研究対象は一八世紀から現代に至る「吐き気」にかかわる諸文献である。従来の数少ない「吐き気」研究の中で、本書は「芸術・美学・哲学における吐き気」の役割を問うた初めての試み（二一九頁）である点で新鮮である。

序章は、本書の内容を簡潔に回想することができるような要旨になっている。また、先行の研究についての論究がなされる。その後、次のような第I章から第IX章が続く。

第I章では、メンデルスゾーンをはじめとする十八世紀の吐き気の理論が取り上げられている。第II章では、ヴィンケルマンの古典主義美学を中心に取り上げ、吐き気にまつわる諸対象が個別に取り上げられている。第III章では、カントによって捉えられた「生命感覚」としての吐き気が

中心に論じられる。第IV章では、ロマン主義とローゼンクランツの『醜の美学』が主として取り上げられる。第V章では、ニーチェの思想が取り上げられ、吐き気の超克について分析される。第VI章では、フロイトの精神分析が取り上げられる。倒錯したリビドーや、神経症的な吐き気が論ぜられる。第VII章では、カフカの諸作品を論ずるなかで、吐き気を催させるものについて分析される。本章は二二四頁を占める圧巻であり、カフカの作品論としての独立の著作としても読めると思われる。第VIII章では、バタイユにおける「聖なるもの」の経験としての吐き気が論ぜられ、サルトルにおける、おのれ自身の「実存そのもの」の経験としての吐き気が論ぜられる。第IX章では、クリステヴァの「アブジェクト」の理論と親和的な吐き気について論ぜられる。最期に「アブジェクト・アート」について論ぜられて終わる。

全体を通して印象に残るのは、「吐き気を催させるもの」として、ある種の「老婆」が繰り返して登場することである。著者自身、本書は「老婆」にまつわる（男性的な）イメージネーションについての書物」（二三頁）であると述べるほどなのである。

原著 Wulfred Menninghaus, *EKEL Theorie und Geschichte einer starken Empfindung*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1999.